

生きる喜び

八重瀬町立具志頭小学校六年 宮川 晴圭

「戦争は、とてもひどいな。これ以上戦争をしてはいけない。」

そう思っているけど、テレビニュースで見るテロや内戦を起こした国のことを「ひどいな」とか「もうやめればいいのに」とか思っているだけで、心のすみではどこか人ごとのように見えているだけでした。

ですが、沖縄で昔はげしい戦争があったことや、ひいおばあちゃんが戦争を体験したことを知り、もう人ごとのように思えず、それからは自分のことのように考えるようになってきました。

今考えてみると、ひいおばあちゃんがつらい戦争の中、生きる希望を捨てていたら、私は、ここにすることはできなかつたと思います。

今という時間を過ごさせているのも、大切な家族や友人に出会うことができているのも、全て。ひいおばあちゃんが、命の尊さを忘れずにいてくれたおかげです。

これは、やさしいひいおばあちゃんにしかできなかったと思うし、ひいおばあちゃんだからこそできたことだと思いました。

「生きる」

その言葉がどんなに大切か、どれだけ深い意味を持っているか、このとき、ようやく知ることができたような気がしました。

「敵」「味方」たったそれだけの地位が、当時、人々を戦わせ、人の心を失わせてしまったのです。

私は、戦争を、平和を求めるあまり、人々が起こした争いだと考えています。沖縄戦が始まったのは、日本がアメリカ力をせめたのがきっかけでした。

でも、日本は、食料を増やしたり、移住する土地をつくったりして、国民を平和にすることも考えていたと思います。

アメリカも、国民を守るためにも戦ったんだと思いました。

戦争が、あそこまでげしくなったのは、人が人としての心を忘れてしまったことや、守るべきものを失ってしまったからではないでしょうか。

だからこそ、私は、「敵」「味方」「国籍」「立場」関係なく、名前がきざまれている平和のいしじを平和の大切さを伝えてくれる場所として大切にしたいと思いました。

ひいおばあちゃんと平和のいしじに行ったとき、戦死した兄の名前を見つけると、真っ先にかけてより、大つぶのなみだを流していました。

そのときのひいおばあちゃんは、見たこともないほど悲しい顔をしていて、もう、あんな顔は二度と見たくないと思いました。

私が、戦争の時代を生きた人達の心のいたみやいかり、悲しみを全て分かってあげることができなくとも、命の大切さを後世に伝え今を一生けん命生きることができません。

もう、二度とあんな悲しい誤ちの争いを起こしてはいけないし、生きる喜びを忘れてはいけません。

そのためにも、私達は、命のとうとさ、戦争の悲さんさ、生きることができると喜びを分かり、伝えていかなければならないのではないのでしょうか。